

わたしは何者でしょう

出エジプト記3章1～12節

モーセは、しゅうとでありミディアン人の祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに来た。そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」

[序] 拾われた子の不安

私の恩師熊野牧師が説教の中で幾度か、自分の父親からこんなことを言われたとおっしゃっていました。「清樹、お前は白川の橋の下で泣いていたのを、作爺が拾ってきた子だぞ」。勿論お酒に酔った時の冗談で、お母さんがすぐそばから「また冗談を言って」と否定してくれていました。でも何かの拍子に「自分はこの家の子ではなかったのか」という思いが心を横切ることがあったそうです。

もしもそれが事実だったとしたら、熊野清樹少年はどんな大人になっていたことでしょうか。兄や妹と比べて、だから自分はこんな自分なのだとか、ホントの親はどんな人だろうか、今何処でどう暮らしているのだろうか等々、独りで思い悩んで成長したのではないのでしょうか。ひょっとしたら親を探しに家出したかも知れません。あの熊野先生にして子ども時代に抱いた小さな不安が、老年になっても、説教に出てくるほどに、心に残っているのですね。

[1] 生き方を変えようとしたモーセ

モーセは王女に拾われて、その子としてエジプトの王宮で育ちました。モーセという名はヘブライ語の動詞「マーシャー」（引き上げた）に由来すると2章10節に説明されています。しかし命名した

のは王女ですから、ヘブライ語ではなくエジプトの言葉で付けたはずです。エジプト王の名には〇〇メス、〇〇メセス、例えばラメセス、アメンメセス等があります。このメス、メセスとは、「生んだもの」という意味です。「ラー(太陽神)が生んだ者」だから「ラメセス」なのです。

モーセも王族の一人にみなされたとすれば〇〇メスというエジプト名を持っていたでしょう。しかし後にユダヤ人たちは自分たちの大指導者として活躍した彼を、エジプト風名前の前半である異教の神の名〇〇を取り去って、残りのメスをヘブライ語のマーシャーに読み替えて呼んだのではないかと、日高先生は解説しています。とにかくモーセはヘブライ人でありながら、王女の子としてエジプト名で呼ばれて王宮で育ったことは、当然でした。

では誰が彼にヘブライ人だと教えたのでしょうか。王女に乳母として仕えて、モーセに自分の乳を飲ませて大きくした生みの母親でしょうか。或いは籠の蓋を開けてひと目みただけで「これはきっとヘブライ人の子です」と言いながら、それでもふびんに思っただけで養子にした王女自身が、彼に語り聞かせたのでしょうか。

いずれにしてもモーセは、自分がヘブライ人でありながら、ヘブライ人から切り離されて、エジプト人として育てられているという一つにならない二つの人種を抱えて、自分をどう理解し、どう確立していくべきか、大いに悩みながら成長していったのではないのでしょうか。

私は丁度一年前にも、在日二世韓国人で東大教授としてTVや新聞・雑誌でも活躍している姜尚中(カン・サンジュン)さんの著書にしるされた在日の悩みをご紹介しました。「在日であること自体が潜在的に犯罪者であるかのような、目に見えない雰囲気社会に充満していた。ともすると不安に駆られやすい精神的弱さ、他者の眼差しに過敏になりやすい心性。なぜ在日として生まれてきたのか、在日としての我が身に対するやるせなさや怒りのような感情を吐き出せる友もいない孤立感が、自分を憂鬱にしていた。

世界で一番好きな国日本、同時に一番嫌いな日本、この両方が自分の内にある分裂した感覚。その中で両親の生まれ故郷韓国を訪ねた後、それまで自分自身で抑圧してきた自分を積極的に現していこうという意欲が湧き上がってきて、私は永野鉄男という日本名を捨て、姜尚中を名乗ることにしたのです。日本とも南北朝鮮とも折り合いがつけられないまま、在日として生きてきた。しかしこの折り合いの悪さ、落着きの悪さが、逆に東北アジアと共に生きる新しい可能性に通じているのではないかと思うようになったのです。」

私は日本という国で在日二世として苦悩しながら、自己を確立してこられた姜尚中さんの告白を読んで、エジプトの王宮でヘブライ人として成長したモーセの苦悩を思いやりました。彼は十分に成人した40才の時に、同胞ヘブライ人が重労働に服している現場を見に行きました。そして監督のエジプト人がヘブライ人を打っているのを見ると、辺りを見回して誰もいないのを確かめてから、監督官を打ち殺して砂に埋めたのです。そして翌日もまた現場に出かけています。

モーセは国王がヘブライ人に過酷な労働をさせて痛めつけていることを、知るようになったのです。自分ひとり王宮で安閑としては居られない思いが激しく燃え上がってきて、じっとしていられなくなったのでしょ。彼は考えに考えた末に、ヘブライ人と全く隔離していた生き方を変えようと決心して王宮の外に出ました。そして同胞と共に生き、その苦しみを少しでも軽くしようとしたのです。

翌日、ヘブライ人同士がけんかしているのを見て、仲裁に入りました。「誰がお前を我々の監督や裁判官にしたのか。お前はあのエジプト人を殺したように、このわたしを殺すつもりか」。ヘブライ人は自分を、同胞を救ってくれた仲間とは見てくれない。敵側エジプト人の仲間と見ている。すると自分を守ってくれるよりも、自分をお節介者として、当局に知らせるに違いありません。モーセは逃亡しました。そして王の逮捕を危うくまぬがれたのでした。

[2] 神の人

ここにエジプト人からもヘブライ人からも受け入れられずはじき出されているモーセの姿が、はっきりと浮き彫りにされています。彼は遠く東のシナイ半島を越えたミディアンの地にたどり着き、祭司エテロのもとに寄留することになりました。娘のツィポラと結婚し、男の子が誕生します。ゲルシヨムと名付けました。「そこで(シヤム)は寄留者(ゲール)」といった意味です。その土地で一切の地位や資格を持たず、現地の人々の庇護を受けて、身を寄せて生きるしかない外国人のことをさします。

「そこで」がエジプトを指すとするならば、モーセが40年間生まれ育った地エジプトが、もはや彼の故郷ではなくなったことを言い表したことになりましょ。40年間王女の子として王宮に育っても、彼はエジプト人にはなれなかったのです。かといってヘブライ人も彼を同胞とは見てはくれませんでした。結局かれはエジプト人でもヘブライ人でもなかったのです。

その様なモーセをミディアンの地は温かく迎えてくれました。彼はその地で家族を得ました。羊飼いとての仕事も得ました。しかし40年後に神さまは彼を再び その地から呼び出して、ヘブライ人の大集団をエジプトから約束の地カナンへと移動させる40年の旅路を送らせて、生涯を閉じさせたのでした。そしてモーセの墓は ヘブライ人の誰も知らないのです。

神さまは、モーセが羊の群れを導きながらホレブの山に来た時、不思議な火をもってモーセを御許に呼び寄せられました。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る」。

神さまは、エジプトの地で苛酷な労働を強いられて、痛み、苦しみを、叫ぶヘブライ人の所に降って行き、彼ら一人一人の傍らに身を置いてくださる、そして約束の地カナンへと、救い出そうとしておられることを、モーセにお告げになりました。「だからモーセよ、今、行きなさい。わたしは必ずあなたと共にいる」と語りかけたのでした。

モーセは答ました。「わたしは何者でしょう。エジプト人にもなれず、ヘブライ人としても認められず、今はミディアンの地の寄留者です。一体私は何人として、ヘブライ人の所へ行くのですか。また何人としてエジプト王の前に立つのですか。ヘブライ人が皆、私をヘブライ人の代表者として支持して、エジプト王の前に立たせてくれるでしょうか。或いは、エジプト人の一人として、国王のヘブライ人に対する取り扱いは間違っていると糾弾することが出来るのでしょうか。私は自分が何人なのか、根無し草のような心細さを覚えている者なのです」。

これに対する神さまの答は、「ヘブライ人としてでもなければ、エジプト人としてでもない。わたしが お前と共にいるという神の人として、わたしに遣わされて、エジプトのヘブライ人のもとに行き、またファラオの前に立つのだ」。モーセはかつて正義感に駆られてエジプト人の監督を殺しました。しかしそれによってはヘブライ人の支持を得ることが出来ず、同胞として受け入れてもらえませんでした。モーセが立つべき所は、神と共にいまし、神に遣わされ、神の御業を為すという神の人としての召命だったのでした。

[結] 歴史を導く神の備え

ヘブライ人の大集団をエジプト帝国から脱出させる出エジプトは、まさに大きな困難を伴う大変な仕事です。人並みはずれた優れた能力を備え、何よりもヘブライ人の支持を受けている者でなければなりません。ところがモーセはヘブライ人であってヘブライ人ではないのです。彼が尻込みして辞退し続けたのも当然でした。しかし神さまはモーセの上げる理由に一つ一つ答えて、彼を説得してしまわれました。神さまはどうしてこのようなモーセをお召しになったのでしょうか。

誕生からこの時までの80年間の歩みを見てみましょう。第一に、彼は奴隷のように虐げられていたヘブライ人として誕生しながら、王女に拾われ、王宮で40年間教育を受けました。王族の一員として国を治める法律を学んだに違いありません。それが、シナイ山で律法を授かり、これを基にして神の民としての細かい法を定めるのに役立ちました。また何よりもイスラエルの脱出にあたってファラオと十回以上も交渉をしなければなりません。彼が国王を恐れず、対等に立ち向かえたのも、王宮生活での生立ちが役に立ったに違いありません。

第二にミディアンでの40年にわたる羊飼い生活で、シナイ半島からカナ南の荒野一帯の地理、気候に関する十分な知識を持つことが出来ました。またかよわく迷いやすい羊たちを忍耐と優しさをもって導く修練も身につけることが出来ました。だからこそ150万を超える大集団を、律法によって整えつつ、40年かかって荒れ野の中を忍耐強く導き抜くことが出来たのでした。

神さまはイスラエルの民を大いなる民にするために、70人余のヤコブ一族を、ヨセフを用いてエジプトへ移住させて大いなる民に成長させました。次にこの大集団をカナンの地に戻すために、モーセを誕生させて王女と結び付け、40年間を王宮で教育し、ミディアンの地では羊飼いを40年経験させて訓練なされたのでした。神さまは歴史のはるかに先を見て備えをしつつ、救いの御業を進め

ていかれるお方なのですね。

あのヨセフは兄たちに繰り返し言いました。「命を救うために、神はわたしをあなたたちよりも先にお遣わしになったのです」。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」。まさに歴史は神さまに導かれて進められていきます。日常の出来事の中に、神さまの御心と御業を見出していく信仰の目をもたなければなりません。

そして神さまがこの私をお用いになろうとして、お召しになった時には、神さまが共にいて下さり、神さまがお遣わしになっている信仰に立ち、お応えしていきたいものです。

民主党の代表選挙が明日行なわれ、次の総理大臣が選ばれます。誰がなっても大して変わらないのでしょうか。歴史を導く神さまは、人を選んでお用いになるのです。神によって整えられ、御用に召されるという心を持つ人が選ばれて、重責に当たってもらいたいものです。多くの人々の命を救おうとされる神さまの御心が行われますよう、政治家たちのために祈っていかねばなりません。

完